

子どもの自主的な読書習慣の形成に向けて

The formation of children's voluntary reading habits

阪根 健二, 小堀 訓子, 池上 朗子, 北島 孝昭

SAKANE Kenji, KOBORI Kuniko, IKEGAMI Akiko and KITAJIMA Takaaki

鳴門教育大学学校教育研究紀要

第35号

Bulletin of Center for Collaboration in Community

Naruto University of Education

No.35, Feb, 2021

子どもの自主的な読書習慣の形成に向けて

The formation of children's voluntary reading habits

阪根 健二*, 小堀 訓子**, 池上 朗子***, 北島 孝昭

*〒772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島748番地 鳴門教育大学 地域連携センター

*〒772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島748番地

**〒774-0047 阿南市下大野町三條5番地 阿南市立大野小学校

***〒779-4102 つるぎ町貞光字野口87番地 つるぎ町立貞光小学校

SAKANE Kenji*, KOBORI Kuniko**, IKEGAMI Akiko*** and KITAJIMA Takaaki

*Center for Collaboration in Community Naruto University of Education

748 Nakajima, Takashima, Naruto-cho, Naruto-shi, 772-8502, Japan

**Ono Elementary School

5 Sanjo Simoono-cho, Anan-shi, 774-0047, Japan

***Sadamitsu Elementary School

87 Noguchi. Sadamitsu. Tsurugi-cho, 779-4102, Japan

抄録：本研究は、学年が上がるにつれ進むといわれている「読書離れ」に歯止めをかけ、子どもたちが生涯にわたって読書に親しみ、読書を楽しむ習慣を形成するための実践についてまとめたものである。阿南市教育委員会・美馬市教育委員会において、鳴門教育大学や徳島県教育委員会と連携し、取組を進めた。両市の現状から、阿南市学校図書館サポーター及び美馬市立図書館との連携を主軸とした取組が有効であると判断し、研究を進めた。その結果、図書館サポーターや図書館司書の読書に関する専門性を生かした働きかけの有効性が明らかになった。専門的知識や学校と市立図書館をつなぐネットワーク、本に関する幅広い知識等を生かした働きかけは、子どもたちと様々な本との出会いの場や本の魅力を知る機会の設定を可能とした。本研究で構築した連携体制を維持・充実させることにより、子どもたちの自主的な読書習慣の形成が実現すると期待される。

キーワード：読書習慣 学校図書館 市立図書館 連携

Abstract : The purpose of this study is to steer students away from not reading, which is said to increase as their grade level increases, and help them become familiar with reading throughout their lifetime and to form enjoyable reading habits. This initiative was undertaken by the Anan City Board of Education and the Mima City Board of Education, with the cooperation of Naruto University of Education, the Tokushima Prefectural Board of Education, and such. Based on the current situation in both cities, it was determined that an approach involving the cooperation of the Anan City School Library Supporters and the Mima City Library would be effective, and proceeded with the study accordingly. As a result, it was revealed that an approach relying on the expertise of the library supporters, librarians, and such was effective. By utilizing their expertise, their knowledge of a wide range of books, and a network that links the school(s) with the municipal library, it became possible to create an opportunity where children are introduced to a variety of books and the charm of them. It is expected that through the enrichment and maintenance of the cooperative system established with this study, children's voluntary reading habits will also be realized.

Keywords : reading habits school library municipal library cooperation

I. はじめに

「子どもの読書活動の推進に関する法律」（平成13年法律第154号）には、子どもの読書活動は、子どもが、言葉を読み、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上

で欠くことのできないものであり、すべての子どもがあらゆる機会とあらゆる場所において自主的に読書活動を行うことができるよう、積極的にそのための環境の整備が推進されなければならないという基本理念が掲げられている。また、中央教育審議会答申（平成28年12月）には、読書活動の充実や言語環境の整備、言語活動の充実、

学校図書館の計画的利活用を図ることにより、児童生徒の自主的、自発的な読書活動を充実することと記されている。さらに、「子供の読書活動の推進に関する基本的な計画（第四次基本計画）」（平成30年4月）には、読書活動は、精査した情報を基に自分の考えを形成し表現するなどの「新しい時代に必要となる資質・能力」を育むことに資するという点からも、その重要性が高まっていると示されている。

徳島県教育委員会では、国の基本計画に基づいて、「徳島県子どもの読書活動推進計画（第三次推進計画）」が平成26年3月に策定された。この推進計画では、自主的な読書活動は人格の形成と個人の能力の伸長、主体的な社会参画を促すものとして、民主的で文化的な社会の発達に不可欠のものであり、読書活動により、子どもたちは時間的にも空間的にもより大きく、広く、深い世界に到達し、思考力を伸長することができると読書活動の有用性が明言されている。そして、子どもの自主的な読書活動を推進するため、「子どもの読書活動」の意義や重要性について県民の理解・関心を高め、家庭・地域・学校の連携のもと県民総ぐるみで、読書環境を整備することをめざすという基本方針を掲げている。

その徳島県の方針を受け、阿南市教育委員会及び美馬市教育委員会では、「徳島県教育振興計画（第3期）」（平成30年3月）の施策のひとつである「徳島『未来の学び』創造プロジェクト」の一環として、鳴門教育大学や徳島県教育委員会と連携し、子どもの読書活動推進に向けた取組を進めることとした。

II. 課題の分析と取組の方向性

平成29年度に実施された「第63回学校読書調査」（公益社団法人全国学校図書館協議会及び株式会社毎日新聞社）によると、全国の子どもの不読率（1か月に一冊も本を読まない子どもの割合）は、小学生5.6%、中学生15.0%、高校生50.4%であった。「子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」では、小学生と中学生の不読率は中長期的には改善傾向にあるが、高校生の不読率は依然として高い状況にあると指摘されている。

平成31年度全国学力・学習状況調査における1日の読書時間に関する設問への回答結果では、徳島県の小学校6年生は、「全くしない」と答えた児童の割合が15.7%、中学校3年生は36.2%であった。同じく、阿南市の小学校6年生は15.0%、中学校3年生は41.3%、美馬市の小学校6年生は10.5%、中学校3年生は30.9%であった（図1）。徳島県及び阿南市、美馬市においても、全国と同様に、学年が上がるにつれ読書から遠ざかる傾向があることが分かる。子どもたちの読書活動について、生涯にわたって読書に親しみ、読書を楽しむ習慣を形成

するためには、発達段階に応じた読書活動や読書に関する発達段階ごとの特徴を踏まえた取組が進められることが重要であるとの指摘もある。

そこで、阿南市教育委員会及び美馬市教育委員会では、読書に関する発達段階ごとの特徴の中の、「小学校中学年になると、最後まで本を読み通すことができる子どもとそうでない子どもの違いが現れ始める」という傾向と「高学年では、発達がとどまったり、読書の幅が広がらなくなったりする者が出てくる場合がある」という傾向に着目することとした。この小学校中学年・高学年の分岐点に焦点をあて、自分では手に取らない様々な本と出会い、本のおもしろさや魅力を知る機会を設定することが、子どもたちの読書の幅を広げ、自主的な読書習慣を形成する上で重要であると考えた。両市の現状から、阿南市では、阿南市学校図書館サポーターとの連携、美馬市では、美馬市立図書館との連携を主軸とした取組が有効であると判断し、研究を進めることとした。

ここでは、阿南市及び美馬市で実施した「読書」についての各種の取組を紹介し、その有効性や課題について述べる。

III. 課題改善に向けての実践

1. 阿南市学校図書館サポーターとの連携

1) 取組の実態

ア 阿南市学校図書館サポーターとは

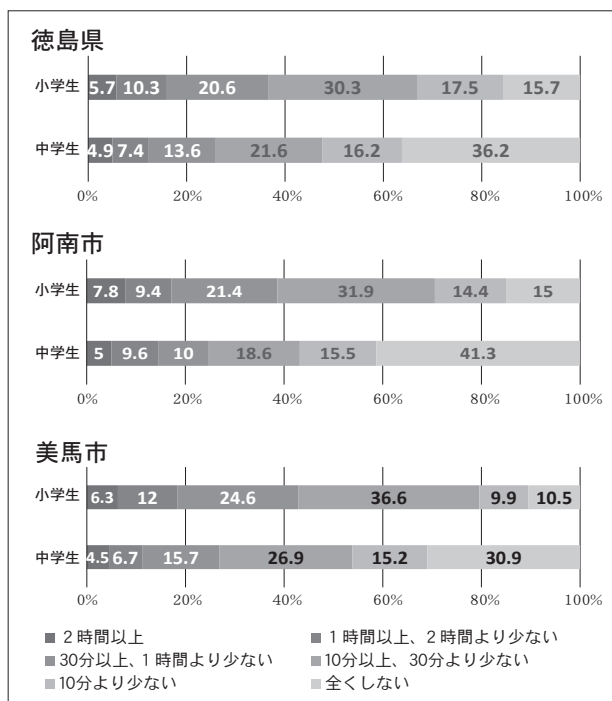


図1 平成31年度全国学力・学習状況調査 質問紙

「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、読書をしますか（教科書や参考図書、漫画や雑誌は除く）」

阿南市では、平成28年度より阿南市内の小学校・中学校に阿南市学校図書館サポーター（以下、「図書館サポーター」と呼ぶ）を段階的に配置してきた。図書館サポーターは、阿南市立小学校・中学校での学校図書の整理・貸出、読書の啓発等の業務に従事している。平成30年度からは6名配置されている。各学校のニーズに合わせて、学校図書館の環境整備や新刊図書の受け入れ等、図書に関わる多くの業務を図書館担当教員と連携しながら進めている。また、読み聞かせを行ったり、図書委員会の活動の支援をしたりして、子どもたちへの読書啓発も行っている。

イ 研修の充実

平成30年9月に実施した図書館サポーターへのヒアリングからは、成果と課題が見えてきた。成果としては、図書館サポーターの配置の制度としての定着や学校の読書環境の整備の促進等があげられた。課題としては、子どもたちとの関わりが少ないことや小学校中学年以上の子どもたちの読書離れに対する啓発活動がなかなか実施できないこと等があげられた。

そこで、平成30年度後期からは、読書の啓発活動への積極的な関わりを目指して、特設研修を実施することとした（表1）。特設研修では、活動計画や振り返りを行うこと、図書館サポーターのスキルアップのための研修を実施することを目的とした。

第1回特設研修では、「子どもの読書活動推進に向けて」をテーマとしたワークショップ型の研修を行った。子どもたちの読書に関する現状やめざす姿、これからの具体的な取組等についてKJ法を用いて話し合い、子どもたちと様々な本との出会いの場の設定が図書館サポーターの大きな役割のひとつであることを共通理解した。

第2回特設研修では、令和元年度の年間活動計画作成に向けてワークショップ型の研修を行った。子どもたちと様々な本との出会いの場として、図書館サポーター全員が「ブックトーク」に新たに取り組むという方向性を見いだした。

第3回特設研修では、「学校と図書館の連携－ブックトークの実践を中心に－」をテーマに研修を実施した。先進的な取組をしている美馬市立図書館に協力を依頼し、ブックトークについての知識や留意点等を学んだ。鳴門教育大学のサテライト事業を活用し、美馬市立図書館と阿南市内の研修会場をつないで実施した。ブックトークの実践的手法についての講義を聞くとともに、ブックトークの実演を見たことで、より具体的なイメージをもつことができた。図書館サポーターのブックトークへの意欲向上やスキルアップを図ることができた。

第4回特設研修では、ブックトークの実践についての振り返りを行った。テーマを「食」に統一したことで図

書館サポーター間での選書に関する情報交換や相談ができたこと、児童書にチャレンジする子が出てきたこと等の成果があげられた。また、時間配分や学年に応じた選書等の工夫、ブックトーク後の読書の機会を設定するために学校の蔵書を多く活用する等の改善点を見いだし、今後の方針を打ち立てることができた。

第5回特設研修では、香川県観音寺市で開催された四国地区学校図書館研究大会での研修内容を伝達した。この研究大会では、「豊かな心と自ら学ぶ力を育む学校図書館」を大会主題として進められた研究の成果が発表された。研究大会での学びについて、資料や写真を提示し、伝達した。

第6回特設研修では、令和元年度の取組を振り返るワークショップ型研修を実施した。様々な本との出会いの場を設定するいろいろな取組を行うことができたという成果があげられた。反面、読書環境の整備に費やす時間が不足してしまったという課題も明確になった。

表1 阿南市学校図書館サポーター特設研修

番号	月日	研修内容（研修形態）
1	H30年12月3日(月)	子どもの読書活動推進に向けて(ワークショップ型研修)
2	H31年4月10日(木)	令和元年度年間活動計画立案(ワークショップ型研修)
3	R1年5月29日(木)	学校と図書館の連携－ブックトークの実践を中心に－(サテライト研修)
4	7月1日(月)	各校でのブックトーク実践の振り返り(協議)
5	12月2日(月)	四国地区学校図書館研究大会での学び(伝達研修)
6	R2年2月3日(月)	令和元年度の振り返り(ワークショップ型研修)

ウ ブックトークの実践

「子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」では、成長に伴い他の活動への関心が高まり、相対的に読書の関心度合いが低くなっている子どもも見られることから、引き続き読書への関心を高める取組を行うことの必要性が示されており、その取組のひとつとして「ブックトーク」があげられている。ブックトークとは、相手に本への興味が湧くような工夫を凝らしながら、あるテーマに沿って関連付けて、複数の本を紹介することであり、テーマから様々なジャンルの本に触れることができる。また、村上（2012）は、「ブックトーク」とは、自分で本を読んで楽しむための方法であり、「読みきかせ」から「ひとり読み」へいざなうとても優れた読書指導の方法であると述べている。

同計画では、生涯にわたって読書に親しみ、読書を楽しむ習慣を形成するためには、発達段階に応じた読書活動が行われることが重要であるとも指摘している。このことから、小学校中学年・高学年の子どもたちの読書への関心を高めたり、読書の幅を広げたりするきっかけと

して、ブックトークを行うことが有効であるのではないかと考えた。そこで、図書館サポーターと連携し、ブックトークを3期に分けて実践していくこととした。

第1期（令和元年6～7月）は、どの図書館サポーターもブックトークに初挑戦だったため、テーマを「食」に統一し、全員で協議しながら進めた。小学校9校、中学校1校、326名の子どもたちに実施した。振り返りでは、多くの成果と課題が明らかになった。成果としては、主に以下の5点があげられた。1点目は、テーマの「食」が子どもたちにとって身近であったために、興味をもって参加することができていた。2点目、担任や子どもたちとのコミュニケーションを取るきっかけになった。3点目、児童書にチャレンジする子が出てきた。4点目、学校の中での図書館サポーターの役割について、管理職等と話し合うきっかけになった。5点目、阿南市立図書館からの団体貸出を活用したので、ブックトーク後にしばらく紹介した本を教室に置いておくことが可能となり、子どもが本を手にとることができた。課題としては、以下の3点があげられた。1点目、時間配分に工夫が必要だった。2点目、学年や発達段階に応じて選書の工夫が必要である。3点目、テーマを統一したために、阿南市立図書館からの団体貸出の希望が重なってしまった。

第2期（令和元年9～12月）では、第1期の成果と課題を踏まえて、テーマを統一せずに実施校の蔵書状況に応じて各図書館サポーターがテーマを設定するという方法に変更した。小学校5校、中学校1校で、304名に実施した。テーマは、季節や実施学年の教科学習との関連を考慮したものを選定していた。選書の際には、絵本や物語等の読み物だけでなく、図鑑やレシピ本等も加えバリエーションを豊富にすることと、学年の発達段階に応じて1学年下程度の易しい本と1学年上程度の難しい本を加えて幅をもたせる工夫を凝らした。また、本の紹介の他にも歌やクイズ等の活動を組み込み、子どもたちの興味を保つための構成を工夫した。さらに、できるだけ多種多様な本を紹介するために、各学校の学校図書館の蔵書だけでなく、阿南市立図書館の団体貸出の制度も活用した。紹介した本は教室等の一角にしばらく置いておき、後で子どもたちが読むことができる環境も整えた。読書記録からは、文字が多く、今までは読むのを敬遠して自分からは手にとることのなかった本にも興味をもち、読んでいることが分かった。

第3期（令和2年1～2月）は、図書館サポーターの自主性を重んじた取組とした。第1期と第2期の実践を通して、もっと違う学校や学年で行いたいという思いや紹介したいテーマや本が見つかる等、図書館サポーターの意欲の向上が見られた。そこで、配置校の状況等に配慮しながら、各図書館サポーターが計画、準備、実践を進める形とした。小学校6校、201名にブックトークを

実施した。テーマは、子どもたちの成長にあわせたものや担任からのリクエストに応じたもの等、多岐にわたって設定されていた。今回も幅広い分野からの選書、楽しい構成、実施後の読書環境の整備等、工夫を凝らした実践であった。

2) 成果

図書館サポーターとの連携を図ったことによる成果として、以下の3点があげられる。

1点目は、図書館サポーターの組織化である。研修を充実させることにより、各図書館サポーターが個々で業務に従事するだけでなく、組織として協働することが可能となった。ワークショップ型研修での客観的な現状及び課題把握、めざす子どもの姿についての共通理解を通して、図書館サポーター全体の活動目標を設定することができた。その目標を達成するためには、読書環境の整備が重要であり、その一翼を図書館サポーターが担っているという自分たちの立ち位置も明確にすることができた。そして、学年が上がるにつれ、読書から遠ざかるという最大ともいえる課題に対する手立てとして、ブックトークを配置校で実施するという方向性を見いだした。図書館サポーターが組織として稼働し、阿南市全体として積極的に取組を進めることが可能となった。

2点目は、図書館サポーターという立場を生かした取組を展開することができたことである。村上（2012）によると、まず、「読みきかせ」で本の世界を楽しませ、後に自分で読書する子どもを育てていくことが大切であり、その指導方法として「ブックトーク」は最適であると述べている。各ボランティア団体等の読み聞かせによって、本の世界の楽しさを十分知った子どもたちへの次なる働きかけとして、阿南市では、ブックトークを実

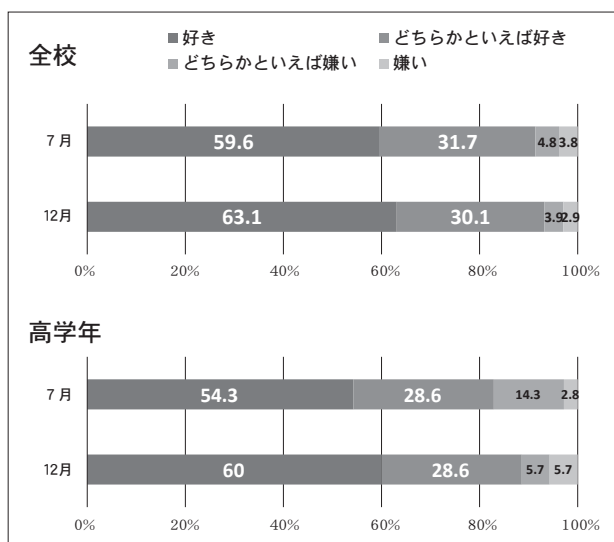


図2 A 小学校読書に関するアンケート
「本を読むことが好きですか」

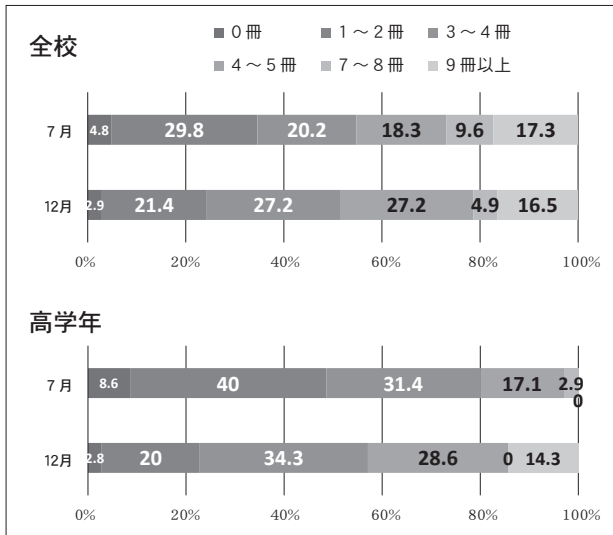


図3 A小学校読書に関するアンケート
「1週間に何冊本を読みますか」

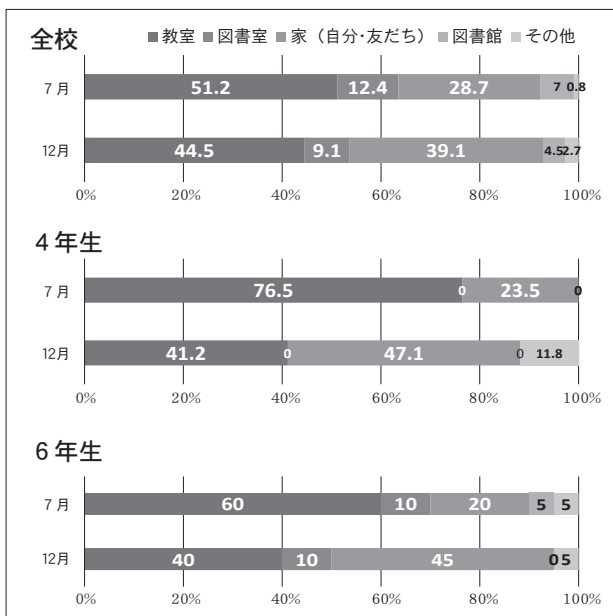


図4 A小学校読書に関するアンケート
「どこで本を読んでいますか」

践することとした。そして、この役割を図書館サポーターが担った。子どもたちの発達段階や学習内容等に応じた幅広い本を紹介できることがブックトークの魅力のひとつである。そのためには、子どもたちの実態を知ることや担任教師のニーズを知ることが重要である。

また、多種多様な本を紹介するために、阿南市立図書館と連携し、図書館司書から選書についてのアドバイスを受たり、団体貸出の制度を活用したりする必要がある。学校と市立図書館をつなぐ、橋渡しの役割が機能して初めて、子どもたちが楽しいと感じるブックトークが成り立つのである。この橋渡しの役割は、他の立場の者が担うのは難しく、図書館サポーターが最適であったと考える。

3点目は、図書館サポーターによる全市的なブックトークの実践により、学年が上がるにつれ進む読書離れの抑制に効果があったことである。令和元年度に実施したブックトークは、小学校11校、中学校1校、対象児童生徒のべ831名であった。このうち、中学年での実施は全体の24.8%、高学年での実施は28.0%、中学生対象は26.4%であり、中学年以上を対象としたブックトークは79.2%と非常に高い割合を占めた。A小学校の読書に関するアンケート調査(令和元年7月及び12月実施)では、本を読むことが好きと答えた児童の割合が、全体では91.3%から93.2%と1.9P増加し、高学年児童は、82.9%から88.6%と5.7P増加した(図2)。1週間に1冊も本を読まない児童は、全体では4.8%から2.9%に1.9P減少し、高学年児童では8.6%から2.9%と5.7P減少した。また、1週間に3冊以上本を読むと回答した高学年児童は、51.4%から77.1%と25.7Pと大幅に増加した(図3)。さらに、自分の家や友だちの家で本を読んでいる児童は、全体で28.7%から39.1%と10.4P増加している。特に、4年生は23.5%から47.1%と23.6P、6年生は20.0%から45.0%と25.0Pと、両学年とも大幅に増加している(図4)。学校から下校後の読書は、強いられた読書ではなく、自主的な読書である。これらのことから、高学年の児童の読書離れに歯止めをかけ、自主的な読書習慣の形成が進み始めているといえる。これは、図書館サポーターによるブックトークでの様々な本との出会いの効果であると考えられる。

3) 課題

令和元年度の振り返りから、2つの課題が明らかになった。

1点目は、図書館サポーターの業務の時間配分の難しさである。これまでは、学校図書館の本の整理や掲示、新刊図書の受け入れ等、ハード面での環境整備を主に担ってきた。令和元年度は、子どもたちと様々な本との出会いの場を設定するというソフト面での環境整備に重点をおいて取り組んだ。そのため、ハード面に費やす時間が減り、環境整備が不十分となった。さらに、団体貸出の制度を利用する学校が増えたため、業務時間外に市立図書館へ行く必要も出てきた。子どもたちの自主的な読書習慣の形成のためには、ハード面、ソフト面、両面からの読書環境の整備が必要である。今後は、組織として、活動方針や方向性を共有し取組を進めていくと同時に、それぞれの図書館サポーターの個性を生かして、ハード面、ソフト面、両面からの読書環境の整備をバランスを取りながら進めていくことが求められている。

2点目は、取組を拡充していく必要がある点である。図書館サポーターが実施したブックトークは、実施校が限定的であった。阿南市全体の子どもたちに対して働き

かけるには、やはりもっと多くの学校で取り組む必要がある。そのためには、本研究の成果を各学校に周知し、ブックトークの有用性の理解を進めなければならない。

2. 美馬市立図書館との連携

美馬市では、市内各小中学校を対象に平成30年10月下旬～11月に学校図書館及び美馬市立図書館に関する聞き取り調査を実施した。課題として、学校図書館の整備不足や家庭への啓発の手立てが十分でないこと等があげられた。美馬市立図書館への要望としては、専門的知識による学校図書館へのサポート、配本サービスや出張図書館の実施等があげられた。平成30年11月29日には、美馬市立図書館と検討会を行い、各学校のニーズに合わせた取組を開始することにした。

1) 取組の実際

ア 学校図書館の環境整備

市内B中学校から蔵書管理のために、蔵書のデータベース化の要望が出されたが、学校だけでは対応できない作業であった。そこで、平成30年度末に美馬市立図書館と美馬市教育委員会が連携して、学校図書館蔵書(8717冊)の装備電算化及び整理配架作業を行った。学校図書館の蔵書を美馬市立図書館に搬入し、図書館司書が登録や管理用バーコードの貼り付け、表紙の糊付け等の作業を行った。

市内C小学校からの要望に応え、令和元年6月に美馬市立図書館司書(以下、「図書館司書」と呼ぶ)2名が講師として、図書委員会の児童10名と担当教員2名を対象に出前授業「図書室整理大作戦!」を行った。「日本十進分類表」の仕組みを学んだ後、ルールに従って分類ごとに本を棚に並べる作業を行った。その後、担当教員向けに、調べ学習等で本を探しやすくする手立てとして表示や図書館のマップ作りについてのアドバイスをもらった。図書の表示やマップは、美馬市教育委員会で作成し、市内小中学校に配布した。

イ 配本サービスの導入

市内D小学校では、市立図書館までの距離が遠く、団体貸出の利用は、難しい状況であった。そこで、令和元年6月から、学校への配本サービスを実施することになった。事前に希望するテーマを美馬市立図書館に伝え、毎月1回配本し、学級文庫として活用するというシステムをとった。1回の搬入冊数は、児童数を考慮して1学年60冊と特別支援学級40冊、合計400冊にした。令和元年度は6回実施した。教員が総合的な学習の時間や社会科学学習等、学習時期に沿ってテーマを決めているので、調べ学習等でも活用することができた。また、希望がない場合は、図書館司書が学年に応じた本を選書して、配

本をした。学級文庫の充実は、学年が上がるにつれ、学校図書館を利用する児童が減少傾向にある現状への有効な手立てのひとつになっている。

ウ 出張図書館

B中学校は、美馬市立図書館から遠距離なため、出張図書館を要望した。円滑な運営方法を模索するために、試験的に平成31年1月に開催した。当日は、学校図書館に図書館司書が選書した美馬市立図書館の蔵書約600冊を搬入し、担当者3名で貸出業務を行った。貸出冊数は、一人3冊まで、貸出期間は約1ヶ月(次回の訪問日)とした。学級ごとに時間を決めて利用したことでスムーズに運営することができたため、令和元年度も継続して開催することが決定した。中学校の希望日に合わせて約2ヶ月に1回開催することになった。令和元年度は、3回開催し、貸出冊数合計は723冊であった。毎回、多くの生徒が熱心に本を選び借りている。リクエストに応じて本を準備することもあり、読書への興味・関心を高める取組になった。また、出張図書館の利用にあたり、全員が市立図書館の貸出カードを作成したので、出張図書館で借りた本を直接美馬市立図書館に返却したり、借りたりすることも可能になり、読書環境の充実につながった。

エ 読み聞かせの出前授業

毎週水曜日の朝の活動で6年生が1年生に読み聞かせをしているC小学校から、児童向けに読み聞かせの指導の要望があった。令和元年7月に図書館司書2名を講師とし、6年生40名を対象に出前授業「やってみよう!読み聞かせ」を行った。初めに、図書館司書による読み聞かせと紙芝居の実演があり、次に、読み聞かせの目的や効果、絵本の選び方の説明や絵本の持ち方やページのめくり方、読み方の指導を受けた。その後、児童は、熱心に読み聞かせの練習に取り組んでいた。

オ ブックトークの実践

美馬市では、教員を対象に1回、子どもを対象に2回、ブックトークを実践した。

美馬地区小教研図書館教育部会の要望から、令和元年7月の夏季研修会に図書館司書を講師に招き、ブックトークの講習会を実施した。ブックトークを初めて経験する教員も多く、まずは図書館司書による「おしごと」がテーマのブックトークの実演を見た。その後、ブックトークの目的や効果、準備等についての講義があった。

市内小学校2校から、ブックトークの要望があった。E小学校では、平成31年2月に低学年7名を対象に行った。学年や時期を考慮してテーマを「ねこ」に設定した。絵本や図鑑等4冊の本の紹介やクイズがあり、最後の振

り返りでは、読みたい本を全員が見つけていた。D 小学校では、令和元年11月に3年生51名を対象に行った。図書館司書と担任が相談してテーマを「さあ、旅に出よう！」に設定した。物語や図鑑等8冊の本について、読み聞かせをしたり、クイズをしたりしながら紹介した。当日は、オープンスクールで約10名の保護者の参観もあった。

カ ブックリストの作成

「家読」を実施している市内F小学校では、絵本選びのために美馬市立図書館に協力を依頼して、お薦めの絵本100冊を紹介した『『家読』のためのブックリスト』を作成し、保護者へ配布した。図書館司書7名が85冊、小学校教員15名が1冊ずつ選んだ。絵本の表紙写真とタイトル、作者名、あらすじを掲載し、教員の推薦図書には、メッセージを添えた。さらに、美馬市立図書館では、ブックリストに掲載した絵本の特設コーナーを設け、ブックリストを無料で配布した。ブックリストの本を借りに行く保護者や地域住民もいて、家庭・学校での取組が、地域へと広がる機会となった。

美馬市立図書館からの要望で、「美馬市立図書館 YA ボランティア結成5周年記念誌みんなのおすすめブックリスト」作成に市内G中学校1年生42名が参加した。美馬市立図書館 YA ボランティアとは、同世代の人たちへの本や図書館の魅力の発信を目的とし結成した中高生のボランティア組織である。今回、結成5周年を記念して中高生向けのブックリストを作成することになった。ブックリストには、42名がかいた推薦図書の紹介POPや市内高校生4名、YA ボランティアメンバー、図書館司書の推薦図書の紹介文等を掲載した。作成したブックリストは、市内中学生全員を対象に配布した。平成28年度「子供の読書活動の推進等に関する調査研究」（文部科学省）では、中学生時期の子どもの本を読むきっかけとして「友達がおすすめの本を教えてくれたり貸したりしてくれたりすること」が高い割合を示していることから、ブックリストは、読書啓発への有効な手立てになったと考えられる。

2) 成果

美馬市立図書館との連携を図ったことによる成果として、以下の4点があげられる。

1点目は、学校のニーズに合わせた取組が実施できたことである。これまでも学校図書館支援やブックトーク等を実施していたが、今回、新たな取組として、出前授業や定期的配本サービス、出張図書館、ブックリスト作成を行うことができた。学習指導要領においても示されているように学校図書館が果たす役割は一層重要になっており、美馬市立図書館との連携を継続することで、

子どもの読書や学習活動がより充実すると考えられる。

2点目は、図書館司書の専門性を生かした学校図書館の環境整備ができたことである。学校図書館の蔵書のデータベース化により、子どもへの図書貸出状況や蔵書の内容等が把握できるようになり、多様な興味・関心に応える学校図書館の整備が可能になった。また、教員の新聞図書受け入れ業務の負担軽減にもつながった。

3点目は、定期的配本サービスの導入が、学習活動の充実につながったことである。開始当初は、多くの学年が学級文庫の補充の形の利用であった。しかし、回数を重ねるごとに、学習や季節に関係する内容を希望する学年が多くなった。調べ学習では、児童数に応じた図書が必要になることから学校図書館だけでは対応が難しい場合

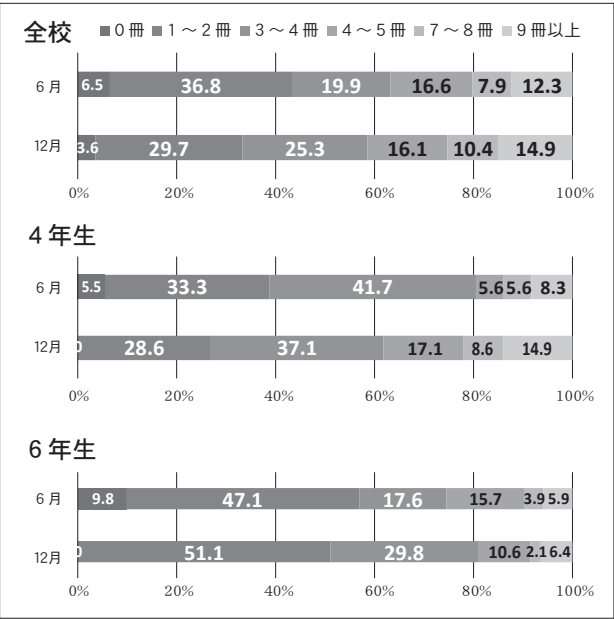


図5 D小学校読書に関するアンケート
「1週間に何冊本を読みますか」

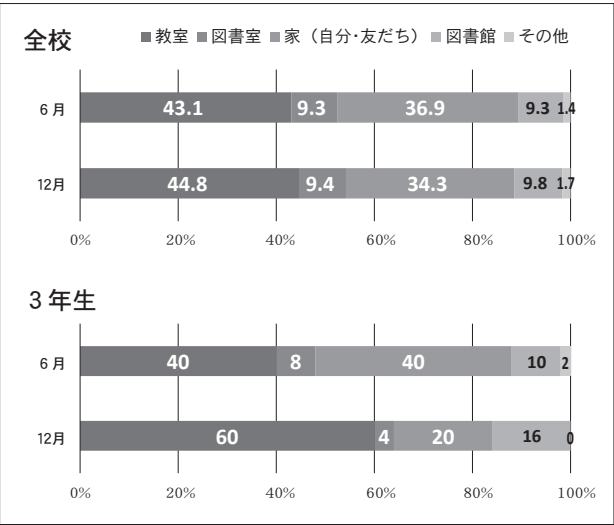


図6 D小学校読書に関するアンケート
「どこで本を読んでいますか」

が多かったが、配本サービスを利用することで充実した学習につながった。この取組は次年度も継続予定である。

4点目は、子どもの読書意欲が高まったことである。D小学校の児童を対象に令和元年6月と12月に実施した読書に関するアンケート結果では、1週間に1冊も本を読まない児童は、6.5%から3.6%と2.9P減少した。特に4年生は、5.5%から0%に、6年生は、9.8%から0%になった。全体的に読書数は増加し、1週間に3冊以上読む児童は、56.6%から66.7%と10.1Pも増加した(図5)。また、美馬市立図書館で本を読んでいると答えた児童の割合が9.3%から9.8%と0.5P増加し、ブックトークを実施した3年生では、10%から16%と6Pも増加した(図6)。これらのことから、連携による読書環境の充実が子どもの読書意欲の向上につながったと考えられる。

3) 課題

課題としては、2点あげられる。

1点目は、学校側に年間を見通した美馬市立図書館との連携が求められることである。今回の取組は、学校が希望する時期と美馬市立図書館が対応できる時期を確認しながら進めた。特に、配本サービスや出張図書館は平成30年度末に打合せしたことで、学校の希望する時期に開始することができた。美馬市立図書館では、通常業務と並行して、ブックトークに関しては、選書やシナリオ作り、練習等で約2か月の準備期間が、また、出前授業については勤務体制の変更等が必要となってくる。学校側の要望を計画的に出すことで、美馬市立図書館の日程調整等が可能になり、より多くの取組につながると考えられる。

2点目は、取組の継続である。これまでも美馬市立図書館と学校との連携した取組は行われていたが、担当教員が替わると継続が難しい場合があった。今回、出張図書館や配本サービスを実施している学校では、アンケートの肯定的結果や子どもたちの様子から、次年度の継続が予定されている。取組を継続するためには、その内容や子どもたちへの有効性を学校内で共有するとともに、学校図書館の年間活動計画等に位置づけることも、今後重要になってくると考えられる。

3. 教職員・保護者への啓発

1) 取組の実際

ア 教職員への読書活動推進リーフレット作成・配布

「子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」には、「子どもが生涯にわたって読書に親しみ、読書を楽しむ習慣を形成していく上で、学校はかけがえのない大きな役割を担っており、全ての子どもが自由に読書を楽しみ、読書の幅を広げていくことができるように適切な支援を

行うとともにそのための環境を整備する」と学校の果たすべき役割について示されている。また、各学校における読書指導について、読書の機会の拡充や図書の紹介、読書経験の共有により、様々な図書に触れる機会を確保することの重要性も指摘されている。

平成30年度末に実施した図書館サポーターや美馬市立図書館へのヒアリングからは、阿南市立図書館や美馬市立図書館からの団体貸出の制度等を活用している学校が少ないことや図書館サポーターや美馬市立図書館と連携した読書の啓発への取組がまだまだ少ないこと等、阿南市・美馬市の読書環境の整備に関する課題が明らかになった。団体貸出の制度や図書館サポーター・美馬市立図書館との連携方法について、教員への周知が不十分であることが原因としてあげられた。

そこで、この課題を解決するために鳴門教育大学地域教育力向上支援事業を活用し、阿南市では、子どもの読書活動推進リーフレット「自分から進んで本を読む子に～楽しい本との出会いをきっかけにして～」、美馬市では、「子どもの読書環境を見直してみませんか?」を作成・配布することとした(図7)。

阿南市のリーフレットには、読書の重要性や読書に関する子どもたちの現状、「子どもの読書活動推進計画」(平成28年策定)の基本方針に示されている学校が担う役割を明示した。また、平成28年度から阿南市内の小学校・中学校に配置されるようになった図書館サポーターの業務内容や具体的な連携方法についても掲載した。さらに、阿南市立図書館からの団体貸出の手順を図式化して示した。作成したリーフレットは、平成31年4月に開催された阿南市幼稚園教育研究集会(平成31年4月25日)・阿南市小学校教育研究集会(平成31年4月16日)・阿南市中学校教育研究集会(平成31年4月17日)にて約900部配布した。

美馬市では、市立図書館と連携し、学校図書館支援や中学生職場体験受け入れ等様々な取組を行ってきたが、一部の学校や教員に限られていた。そこで、美馬市立図書館との連携内容について知らせるとともに、平成30年度に、学校図書館支援や団体貸出、図書館見学、ブックトークの出前授業を活用した教員の感想を掲載し、その有効性を紹介した。また、団体貸出利用の流れやブックトーク等についても整理し、掲載した。作成したリーフレットは、平成31年4月に美馬市内幼稚園・小学校・中学校の教職員へ約500部配布した。さらに、学校図書館支援やブックトークの出前授業について詳細に内容が分かるパンフレットを作成し、美馬地区小教研図書館教育部会夏季研修会(令和元年7月31日)で図書館教育部員に配布した。

令和2年1月には、鳴門教育大学地域教育力向上支援事業を活用して、子どもの読書活動推進リーフレット第

2号「読書が好きな子どもを育てるために」を作成し、阿南市・美馬市内幼稚園・小学校・中学校の教職員に約1400部配布した（図8）。このリーフレットには、子どもたちの読書に関する課題解決に向けた両市の様々な取組について掲載した。具体的には、子どもたちと様々な本との出会いの場を設定する取組として、両市立図書館との連携事例やブックトークの実践等を掲載し、教職員の共通理解を図った。

イ 保護者への啓発のためのブックトーク実践

子どもの読書活動の推進に関する法律（平成13年法律第154号）には、「父母その他の保護者は、子どもの読書活動の機会の充実及び読書活動の習慣化に積極的な役割を果たすものとする」と保護者の役割が規定されている。また、「子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」には、家庭における読書は、一冊の本を媒介にして家族が話し合う時間を持ち、絆（きずな）を深める手段として重要なものであり、その家族の絆（きずな）が一層深まることを目指す活動として「家読（うちどく）」が取り上げられている。

家読とは、「家庭読書」の略語で「家族ふれあい読書」を意味し、家族みんなで読書をすることで家族のコミュ

ニケーションを深めることを目的とし、子どもを中心に家族で同じ本を読み、読んだ本の感想を話し合うという方法で実施すると定義されている。（家読推進プロジェクト公式ホームページ）しかし、子どもの学年が上がる子どもも保護者も時間的余裕が少なく、実際にはこの定義通りの実施は非常に難しいと考えられる。そこで、家読へのスモールステップとして、家族がそれぞれに好きな本を読む時間を作ることから始めることが有効であると考えた。そのきっかけづくりとして、阿南市では、保護者対象のブックトークを実践することとした。

保護者対象のブックトークは、保護者にも学校にも負担の少ない形で実施するために、授業参観後に15分程度という短時間の場合を設定した。読書の大切さ、子どもたちの読書に関する現状や課題等について説明した後、ブックトークを行った。忙しい保護者にも比較的読みやすい短編集やエッセイ等を紹介した。この他にも、阿南市内の中学校で実施した「ビブリオバトル」での「チャンプ本」も紹介し、様々な読書活動があることも周知した。

また、阿南市立図書館が設立している「阿南電子図書館」の利用方法やメリットについても紹介し、保護者の利用促進を図った。3校の小学校で実施し、80名以上の保護者が参加した。

2) 成果

阿南市では、教職員や保護者への啓発からは、以下にあげる2点の成果を得ることができた。

1点目は、図書館サポーターと学校との円滑な連携が実現したことである。阿南市内の幼稚園・小学校・中学校の教職員を対象に約900部配布した子どもの読書活動推進リーフレットにより、図書館サポーターの業務内容や連携方法が教職員に周知できた。平成30年度、阿南市立図書館の団体貸出制度を活用した学校は、小学校13校、中学校1校であった。令和元年度には、小学校16校、中学校1校と増加した。また、リーフレット第2号を配布後に、それまでブックトークを実施していなかった学級担任から、図書館サポーターへ依頼が入り、新たに141名を対象にブックトークを実施することができた。また、前述のA小学校で毎年度末に実施されている学校評価アンケートでは、児童が読書をする力がついてきていると回答した教職員の割合は、75%から86%と11P増加していることから、教職員が図書館サポーターと連携した読書指導の有用性を実感しているといえる（図9）。

2点目は、保護者の読書への関心が高まったことである。A小学校における読書アンケート（令和元年7月及び12月実施）では、1週間に1回以上家族で本を読むことがあると答えた高学年児童の割合は、5.7%から



図7 読書活動推進リーフレット



図8 読書活動推進リーフレット 第2号

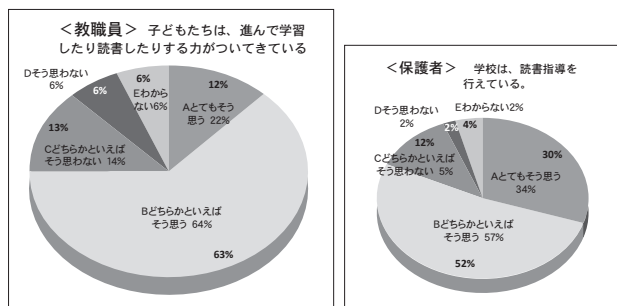


図9 令和元年度A小学校学校評価アンケート

(下の口内は、前年度の数値)

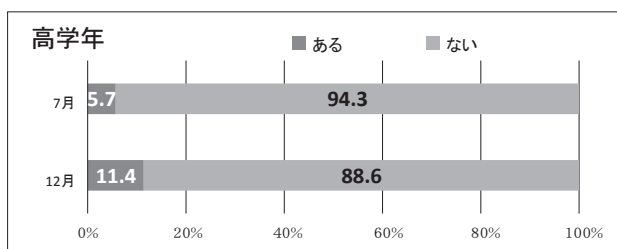


図10 A小学校読書に関するアンケート

「1週間に1回以上家族で本を読むことがありますか」

11.4%と5.7P増加した(図10)。

また、同A小学校の学校評価アンケートでは、学校は読書指導を行うことができていると回答した保護者が、平成30年度は82%であったのに対し、令和元年度は91%と9P増加している(図9)。このA小学校では、保護者啓発のためのブックトークが実施されており、この効果が現れたと考えられる。

美馬市でも、平成31年4月と令和2年1月に美馬市内の幼稚園・小学校・中学校の教職員を対象に約500部配布した子どもの読書活動推進リーフレットにより、美馬市立図書館との連携の有用性を教職員に周知し、さらなる連携の促進を図ることができた。平成30年度の団体貸出を利用した学校は、認定こども園・幼稚園が2園、小学校が6校、中学校が2校で貸出冊数は、1372冊であった。令和元年度は、認定こども園・幼稚園が4園、小学校が6校、中学校が1校で貸出冊数は3684冊(内、配本サービス・出張図書館による貸出冊数は3334冊)と増加した。学校図書館への支援とブックリスト作成については、平成30年度は1校だったのが、令和元年度は2校に増えた。美馬市立図書館との連携内容に幅を広げることができた。

3) 課題

教職員へのリーフレット配布、保護者対象のブックトーク実践に取り組んだが、子どもの読書活動の意義や重要性について、教職員や保護者の理解や関心を深めるには、単発的であったことが課題としてあげられる。子どもたちの自主的な読書習慣を形成するためには、教職

員や保護者等が大きな役割を果たす。人も大切な環境のひとつである。取組を継続し、学校と家庭が連携して、子どもたちが自主的に読書活動に取り組むことができる環境を整備する必要がある。

IV. 終わりに

本研究では、子どもたちの自主的な読書習慣の形成を目的とし、阿南市・美馬市において、図書館サポーターや市立図書館との連携に重点をおいた取組を進めた。この取組により、図書館サポーターや図書館司書の専門性を生かした働きかけの有用性が明らかになった。子どもたちが本を選びやすくするための工夫を凝らした学校図書館の配架や環境整備、市立図書館の団体貸出制度の活用促進、ブックトークの実践等の働きかけは、子どもたちと様々な本との出会いの場や本の魅力を知る機会の設定を可能とした。これらは、図書館サポーターや図書館司書が、専門的知識や学校と市立図書館をつなぐネットワーク、本に関する幅広い知識等を生かしてこそ実現可能であり、大きな役割を果たしたといえる。

また、この専門性を生かした働きかけは、子どもたちや教職員、保護者の読書に対する興味・関心の向上に有効であることも明らかになった。令和元年10月に策定された「徳島県子どもの読書活動推進計画[第四次推進計画]」では、「子供の読書習慣の形成にむけた取組の充実」、「子供の読書活動を支える環境の整備と充実」、「子供の読書活動の普及啓発」が基本方針として掲げられている。そして、「課題解決に向けての施策の方向性」として、教職員や保護者、読書活動に関し専門的知識を持つ者が連携・協力することの重要性を示している。本研究で構築した図書館サポーターや市立図書館との連携体制を今後も維持・充実させることにより、子どもたちの自主的な読書習慣の形成が実現すると考えられる。

一方、取組を継続していく上で、次のような課題が考えられる。本研究では、阿南市及び美馬市において、専門教職員が配置された。これにより、学校と図書館サポーター、或いは、学校と市立図書館をつなぎ、連携を推し進めるコーディネーターの役割を担うことが可能となった。

学校と関係諸機関との連携は、子どもたちの読書環境の整備には、欠くことのできない要素である。専門教職員が配置されない場合には、このコーディネーターの役割を担う教職員が必要となる。各学校の司書教諭や図書館担当教員にコーディネーターとしての役割を求めなければならない。そのために、本研究の取組を周知し、読書環境の整備及び関係諸機関との連携の重要性への理解を深める手立てを構築し、コーディネーターを養成していくことが、今後の課題であると考えられる。

引用・参考文献

- 阿南市教育委員会（平成28年3月） 阿南市子どもの読書推進計画（第二次推進計画）
- 株式会社浜銀総合研究所（平成29年3月） 平成28年度文部科学省委託調査 子供の読書活動の推進等に関する調査研究
- 文部科学省（平成13年12月12日） 子どもの読書活動の推進に関する法律（平成13年法律第154号）
- 文部科学省（平成29年3月） 小学校学習指導要領
- 文部科学省（平成29年3月） 中学校学習指導要領
- 文部科学省（平成30年4月） 子供の読書活動の推進に関する基本的な計画
- 村上 淳子（2012） だれでもできるブックトーク「読みきかせ」から「ひとり読み」へ 国土社
- 中央教育審議会（平成28年12月21日） 幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）
- 徳島県教育委員会（平成26年3月） 徳島県子どもの読書活動推進計画〔第三次推進計画〕
- 徳島県教育委員会（平成30年3月） 徳島県教育振興計画（第3期）
- 徳島県教育委員会（令和元年10月） 徳島県子どもの読書活動推進計画〔第四次推進計画〕
- 家読推進プロジェクト公式ホームページ URL：<http://www.uchidoku.com/htdocs/>

註

本研究は、地域連携センター客員研究員プロジェクト（2018，2019年度）の報告を兼ねている。当時のプロジェクト構成員によって執筆している。

謝辞

本研究にあたり、ご理解・ご協力をいただきました、徳島県教育委員会、阿南市教育委員会、美馬市教育委員会、並びに阿南市立図書館、美馬市立図書館の関係者の皆さまに深く感謝申し上げます。

